

# 百人一首は歌織物

～用捨は心に在り～

47期生

## I テーマ設定の理由

私が初めて百人一首を手にとったのは、確か小学一年生の頃でした。その時は、カルタとして出会ったワケですが、その後、百人一首に触れる機会が多くなってくると、その一つ一つの歌の意味なども分かってきて、非常に興味を覚えました。そんな時、祖母から「百人一首は歌織物になっている」と聞き、ただ百の秀歌の寄せ集めではないことを知りました。私は、「百人一首歌織物説」を自らの目で確認、検証しようと思い、この研究にのりだしました。

## II 研究方法

- (1)文献調査
- ・藤原定家の生涯、書物を追って百人一首の隠された秘密を知る
  - ・昔、貴族の間ではやっていた言葉遊びを調べる
- (2)実際に歌織物につくってみる
- ・専門家の作った歌織物の考察
  - ・自分自身で歌織物を作ってみる。

## III 研究内容

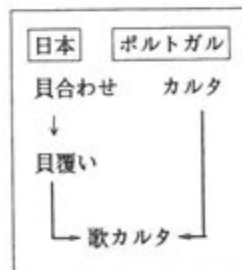
### 1 百人一首とは？

#### (1) 百人一首までのカルタ

日本には、かつて「貝合わせ」「貝覆い」という遊びがあった。

「貝合わせ」…左右に分かれて珍しい貝を準備し、双方から1つずつ番って、優劣を競う遊び。多くの場合、和歌を詠んで添えた。平安朝貴族から始まった遊び。

「貝覆い」…1対の蛤を身と蓋に分け、別々に貝桶に入れておき、このうち一方の半片を場に並べて地貝とし、次に出貝を取り出してつき合わせ、正しく元の身と蓋との合った数を競い合う。院政期から武家社会で生まれた。



▲図1 歌カルタの成り立ち

- ・この貝覆いの貝の内側に、だんだん凝った細工がほどこされ、室町時代になると、歌や絵を書き添えるものが出まわった。
- ・これを厚紙で代用し、「カルタ」形式にすることによって、「歌カルタ」が生まれた。この創始は、元和の初年（1981年）頃京都の公卿、中院通村によるといわれる。
- ・歌カルタの素材には、「源氏物語」「伊勢物語」「古今集」「新古今集」など用いられたが、「百人一首」で定着した。

### (2) 百人一首の成り立ち

百人一首とは、天智天皇～順徳院まで約五百数十年間の歌人たち百人から、一人一首ずつ、選り集められたもの。「一人から一首ずつ、百首集める」のがおもしろいので、後世さまざまな百人一首が作られたので、定家が作ったのを区別して「小倉百人一首」と呼ぶ。今回はこの「小倉百人一首」に焦点をあてて調べた。

- ・百人一首は、歌カルタになる前は、主として大名の奥方や娘達のお手本だった。

Q. そもそも定家が撰集した時、どういう目的で編まれたのだろうか？

- ・百人一首は当初「小倉山荘色紙和歌」と呼ばれていたように、色紙に一首ずつ書いて襖に貼られたもので、「障子歌」の一つであった。障子とは襖のこと。名ある歌人が選り、名ある書道家が筆を振った色紙は大変値打ちがあり、きわめて豪華であった。

Q. 定家の百人一首はどこに貼られたのだろうか？

- ・定家の日記「名月記」の中に、宇都宮入道頼綱の嵯峨山荘へ、「古来の人の歌各一首」を色紙に書いて贈ったという記述がある。宇都宮入道とは、源頼朝の那須野原の牧狩りの際に勢子一千人を提供したといわれる大富豪で、彼の妻は、北時時政の娘であった。この宇都宮入道が京都・嵯峨の中院の地に大邸宅を新築した。これが「嵯峨山荘」または「中院別荘」と呼ばれるものである。

Q. なぜ嵯峨山荘に贈ったの？

- ・定家の子為家がこの宇都宮入道の娘と結婚した関係で、定家は何度かこの嵯峨山荘に招待された。その時、宇都宮入道は定家に対して古来の名歌を色紙に書いて欲しいと懇望した。

一定家の日記「明月記」から

「予もとより、文字を書くことを知らず。嵯峨中院障子の色紙形、ことさらに予に書くべき由、彼の入道懇切。極めて見苦しき事といへども、なまじいに（気が進まないままに）筆を染めてこれを送る。古来の人の歌各一首、天智天皇より以来、家隆・雅経に及ぶ。夜に入り金吾示送す」

Q. 「古来の人の歌各一首」……百首とは書かれていない。

「天智天皇より以来」という点は百人一首と合致するが、99番後鳥羽院、100番順徳院「家隆・雅経に及ぶ」と書かれているのは違うのではないか？

百人一首には私の疑問以外にもたくさんの歴史的な謎が隠されている様だ。文献で調べてみた。果たして、百人一首に秘められた謎とは!?

2 百人一首の謎

(1) 百人一首をめぐる

昔から百人一首は、歌や歌人の選び方がどうも変だ、と言われてきた様です。私もその言葉はよく耳にします。しかし私の目から見ると、どれも劣らず素晴らしい作品だと思えます。情景が目浮かぶし、音まで聞こえそうな歌もあり、とても優雅だと思います。

専門家の意見	私の反論
①何万何千という歌の中からよりすぐった百の歌だというのに、思わず首をかしげたくするようなあまりにも平凡な歌が多すぎる。	①「勅撰和歌集」に収録された歌であり、皆一定のレベル以上だと思う。それに現代人の感覚と当時の人々の感覚は違うのでは？
②百人の歌人の中には第一級の歌人とは言えない人も入っており、しかも当然入っていてしかるべき人物がかなり多く欠けている。	②歌の良し悪しにはかなり主観がまざると思う。歌人の評判に関係なく定家は選んだのではないか？
③99、100番（トリ）の位置にある後鳥羽院、順徳院の歌は出来が良くない。彼らはもっと素晴らしい歌をたくさん残しているのに。	③結局、小倉百人一首は定家のつくったものではないのではないか。そうだとすれば、宇都宮入道に贈った歌は定家だが今伝わっているのは定家が作った歌では無い、という仮説が成り立つ。 ↓しかし 筆跡鑑定で定家であると立証された

(2) 特殊な意図による編さん—用捨は心に在り—

ところが私は、定家自身の書いた百人一首の姉妹編「百人秀歌」につけられた奥書に、この数々の謎を解く手がかりがある文を知りました。

(原文)	(現代語訳)
上古以来の歌仙一首、思ひ出づるに随ひてこれを書きいだす。名譽の人、秀逸の詠、皆これを漏らす。用捨は心に在り。自他の傍難あるべからざるか。	上古からの歌仙の歌を一首ずつ思い出すままに書いた。この中には、歌の名人と誇れ高い人の秀逸な歌といわれるものがほとんど漏れている。けれどもどの歌を用い、どの歌を捨てたか、選択基準は私の心の中にある。他の人間に色々非難されることは、意味のないことだろう。

百人一首は、ある特殊な意図によりつくられた歌集である、と本人が語っているのである。秀歌を集めようとした歌集ではない、という定家の説明は、要するにこの歌集が和歌本来の歌としての出来ばえ以外の何かを選択の原理としたのだという風にしか理解できない。用捨は心に在り。さてその「心」とは一体何？

(3) 言葉遊び

貴族世界ではやっていた言葉遊び、それは本当の意味を、言葉の中に隠すという技です。私は、おそらく定家も、百人一首に何らかの技術的システムをくみこもう

と考えたのではないかと推理した。

(4) 百人一首は「歌織物」

定家自身の作品から彼が言葉遊びを熱心に研究していたことがわかります。例えば、29～35歳頃に書いたと言われる「拾遺愚草買外雑歌」です。この中に言葉つなぎを重視していたという証拠があります。この雑歌は連作歌であるけれども、一番の特徴は文字ぐさりという点です。すなわち、この連作歌の頭の文字を綴ると、四季の風鳥風月の名やいろは47字など、また隣どうしの歌が全部何らかの歌詞を共有し、つながっています。「買外雑歌」は12篇、のべ760首あるが、すべてこうしてつながっています。また、定家が44歳頃に作ったという「物語二百番歌合わせ」を見ると、左歌列の隣り合せの歌どうしの間、右歌列の隣り合せの歌どうしの間だけでなく、同じ番の左歌と右歌の間にもいずれも言葉つなぎが成り立っているのです。こうした事実から、「百人一首」も実は同じ様に言葉がつながって何らかの意味を持つものになるのではないかと、ということで、1兆<sup>13</sup>もある配列方法の中から、

▲復元された歌織物表

専門家によって復元された言葉でつながれた百人一首が左の表です。このようにタテヨコどうしに共通語を含み合うことより歌で編んだ織物になるので「歌織物」と呼ぶことにします。まるで「歌詞クロスワードパズル」の様になります。

### 3 水無瀬の景色が浮かび上がる

歌織物表を書きかえると、下図の絵のように簡略化されます。下にある文字は、歌と歌をつないでいるものです。これは「水無瀬」という場所だといわれます。水無瀬とは、大阪府の東北、京都と境を接する地点嵐山方面から下っている桂川と、琵琶湖から流れ出る宇治川と、奈良から北上する木津川が合流して淀川になるところ、天王山がぐっとせり出して、淀川にせまるあたりにある、ここは、王朝時代に嵯峨天皇や惟喬天皇、それに後鳥羽上皇らの離宮がおかれた景勝の地であり、有数の狩猟地であった。とくに全盛時代の後鳥羽上院は、この地に水無瀬離宮という豪華な宮殿を築き、遊びの時をすごした。定家なども招かれ、歌会を催したりした。いわば、水無瀬は後鳥羽上院を中心としたいわゆる「新古今歌壇のふるさと」なのです。百人一首の描かれるにぴったりなのです。この歌織物には、その地方で有名な史跡の名前や石清水八幡宮、高浜の渡という昔の交通路、また男山という有名な山、渚の院という音殿天王山の史跡の名前、数々の神社などの地名がまるで地図のように浮かび上がってくるのです。また左図の丸の所を順に読んでいくと、「龍神・みなせ滝・みなせ川」という文字までも発見しました。

### 4 なぜ定家は〈歌織物〉をつくったか？

#### 1. 三人の帰り「来ぬ人」への思慕

ここで定家自身の歌を見てみましょう。それには彼自身の気持ちが良く表れているはずだからです。「来ぬ人を松帆の浦の夕風に焼くや藻塩の身もこがれつつ」この意味は、帰り来ぬ人をただひたすら待つ、という意味です。これが定家自身の気持ちであるとすれば、一体誰を？ 一般的には水無瀬離宮の主であった後鳥羽上皇への追慕の気持ちを表したものとされています。定家は、貧乏歌よみ貴族であった自分を高く評価してくれた後鳥羽上皇に恩を感じていたようです。また後鳥羽院は承久の乱で隠岐行きになった悲劇のヒーローです。そんな人への歌としておおびらに後鳥羽院への讃歌をかくと、幕府から痛い目にあわされると思ったのでしょう。だから、全国の歌を集めて、分からないように後鳥羽院へ供養の気持ちも込



▲歌織物の構成

めて讃歌をささげたのではないのでしょうか。また四隈に位置している歌をかいたのは式子内親王、順徳院、後鳥羽院、定家自身になります。仏教の影響で、絵などの四隈に重要人物を描くというのは不自然なことではありません。では式子内親王順徳院とは誰なのか。式子内親王は、定家がひそかに想っていた女の人だったと歴史上されています。しかし彼女は13世紀初めに病死しています。順徳院とは、同じく承久の乱で後鳥羽上皇と行動を共にし、やがて捕えられて島流しになった人なのです。

ここで定家の歌の意味が分かります。彼はきっと、2度と帰ることのない（帰り来ぬ）人を想って、必至にこの百人一首を完成させたのでしょう。とても悲しいお話です。

#### 2. 新たに発見される新事実

歌織物として復元された百人一首をもう一度見てみましょう。なんと、右下の4分の1のスペースの合せ言葉がある順序で並べると、

「見・わた・瀬ば・山も・と・か・住・み・な・せ・川・夕葉秋・と・難・思ひ」となり、また同じく左半分を上のように並べると、

「長・つる・け・ふ・は・む・か・し・に・な・り・ぬ・とも・の・ばの・う・め・よ・わ・れ・を・忘・な」となります。これはそれぞれ

「見渡せば山も霞むみなせ川 夕べは秋となに思ひけむ」 後鳥羽院

「ながめつる けふはむかしになりぬとも 軒瑞の梅上我れを忘るな」 式子内親王と、大傑作といわれた2人の歌が浮かび上がってくるのでした。

### IV 結論

3人の一帰り来ぬ人を想って作られた百人一首。歌人として登りつめた栄光の頂点において、空前の大傑作を歌織物と残した定家の心の中には永遠に帰り来ぬ人は生き続けることなのでしょう。百人一首にはこんな深い歴史と秘められた想いが隠されていたのです。

### V 総括（まとめ）

百人一首について、様々な批判がなされる中、やはり藤原定家の歌の選び方は最高であり、また彼は大天才だった!!ということでしょうか。またそれだけでなく、定家は、一つ一つの歌を10×10に織物のように組み立て、みごとに1つの歌織物を完成させたのです。またそこには水無瀬の素晴らしい景色と、定家の強い思いが、溶けあって広がっています。

これこそ、定家の「心」ではなかったでしょうか。彼が命をかけて編さんされたと言われる「百人一首」私はこれを世界一の作品だと思います。

### VI 参考文献

「百人一首の世界」 青木書店 林直道 1991年 P.19~27, 41~51, 90~100, 120~129, 163